歴代の菊池一族を紹介します

菊池市民広場にある
第15代菊池武光公騎馬像→

菊池氏は南朝方として戦い、北朝方を破り12年間にわたって九州を統治します。

しかし、時代の流れにあらがえず菊池へと戻り、その後は貿易や文化の面に力を注ぎました。戦国時代・下剋上の時代へと移り行く中で、菊池氏は守護職を失い、一族繁栄の歴史は幕を閉じます。

菊池一族は、平安から室町時代後半までの約450年間、熊本を中心に九州で活躍した一族です。源平合戦や元寇など日本史上の有名な戦いにも参加し、蒙古襲来絵詞にはその勇姿が描かれています。

長い歴史の中で最も菊池氏が隆盛を誇ったのは、後醍醐天皇（南朝）と足利尊氏（北朝）が争った南北朝時代です。

初代

菊池則隆（生没年不詳）

1070（延久2）年、太宰府荘官として菊池に赴任したとされ、深川に居を構え、菊池川流域支配の基礎をつくる。深川の佐保川八幡宮や神来の貴船神社勧請のほか、旭志岩本の円通寺の再建も行った。墓所は深川にある。

2代

菊池経隆（生没年不詳）

則隆の子で兵藤警護太郎ともいわれた。1087年～1090年、加恵に諏訪宮と八幡宮を勧請。墓所は出田の若宮神社とされているが、碑などはない。

3代

菊池経頼（生没年不詳）

経隆の長子で、兵藤四郎とも呼ばれた。筑豊に進出して広大な領地を所有していたとされ、後にその領地を鳥羽院に寄進している。墓所は不明。孫に当たる経信は古池城城主である出田氏の祖である。

4代

菊池経宗（生没年不詳）

経頼の長子で、1109（天仁2）年ごろ鳥羽院の武者所として出仕。1113（永久元）年、雪野の八幡宮を勧請している。墓所は不明。

5代

菊池経直（生年不詳～1186）

経宗の長子で、1122（保安3）年、父を継いで鳥羽院の武者所として出仕。1131（天承元）年、菊鹿町の内田八幡宮を勧請した。1186（文治2）年、現在の佐賀県武雄市にて亡くなったとされ、墓所は潮見神社にある。

6代

菊池隆直（生年不詳～1185）

経直の長子。実質的な肥後国司として平氏の九州支配に対抗したが、最後は降伏して平家方になった。家紋を日足紋から並び鷹の羽紋に改めた。墓所は山鹿市の正蓮寺跡にあるとされている。

7代

菊池隆定（1167～1222）

隆直の次男で、長子の隆長が戦死したため跡を継いだ。七坪に産神社、鹿本に米島八幡宮、高橋八幡宮を勧請した。墓所は七城町水次の民家敷地内にあり、兄の隆長、弟の秀直と共に葬られている。

8代

菊池能隆（1201～1258）

隆定の子隆継が早世したため、その子能隆が惣領となった。1221年の承久の乱では、後鳥羽上皇方として幕府（北条氏）と戦ったが敗れた。子には西郷家に入り蒙古襲来のときに活躍した隆政などがいる。墓所は不明。

9代

菊池隆泰（生没年不詳）

能隆の子。父の代に幕府と対抗したため冷遇された。隆泰の子には10代武房のほか、赤星家の祖となった有隆がいる。墓所は不明。

10代

菊池武房（1245～1285）

隆泰の次男。長子は東福寺の住職になった。弟の有隆、叔父の西郷隆政と共に蒙古襲来時に活躍したが幕府からの恩賞が少なく対立していった。菊池神社の境内にある城山神社の主催神として祭られる。墓所は不明。

11代

菊池時隆（1287～1304）

武房の孫。武房の長子である隆盛が早世したため、隆盛の長子である時隆が継ぐことになった。この相続を不服とした叔父の武本と争うことになり、刺し違えて死去したといわれる（病死の説もあり）。墓所は不明。

12代

菊池武時（1292～1333）

武房の孫。鎌倉幕府（北条氏）倒幕を試みるが、周囲の武士団と連携がとれず、子の武重と武光を本拠地へ帰し（袖ヶ浦の別れ）、菊池氏単独で討ち入って敗れた。墓所は福岡市の菊池神社や山鹿市の日輪寺などにある。

13代

菊池武重（1307～1341）

武時の長子。「袖ヶ浦の別れ」の後家督相続。政務に合議制などを採用した菊池家憲を定めた。千の兵で3千の兵を破ったとされる「菊池千本槍」の考案者。菊池神社の主祭神の1柱で、墓所は亘の輪足山東福寺にある。

14代

菊池武士（1321～1401）

武重の弟。北朝方の混乱に乗じ筑後などへの進出を試みたがうまくいかなかった。武光に家督を譲り出家。寺尾野大円寺で「袖ふれし～」の短歌を詠んでいる。墓所は八代市二見、武士が開いた正福寺の裏山の墓地内。

15代

菊池武光（1319～1373）

武重の弟。1348（正平3）年、懐良親王を迎えた。1359年大保原の戦いで勝利し、大宰府に征西府を置き最盛期を迎える。熊耳山正観寺を建立。菊池五山を制定。菊池神社主祭神の1柱。墓所は正観寺の境内にある。

16代

菊池武政（1342～1374）

武光の長子。1367年に肥後守となり同時に家督も継承したと思われる。隈府に本拠地を移した。武光に従いよく戦ったが、武光死去の翌年に死去。墓所は正観寺の境内にある。

17代

菊池武朝（1363～1407）

武政の長子。12歳で家督相続。1375年、台城での水島の戦いをはじめ詫磨原の戦いなどで南朝勢力の盛り返しを図るものの敗退。1392年に南北朝合一となり肥後守護になる。墓所は重味の真徳寺、稗方にある。

18代

菊池兼朝（1383～1444）

武朝の長子。応永の外寇（1419年）で活躍した。1431年、子の持朝に家督を譲り隠居。墓所は七城町岡田の正善寺横にある。亡くなった場所は芦北町の佐敷とされ、そこにも「千寿庵」と呼ばれる墓所がある。

19代

菊池持朝（1409～1446）

兼朝の長子。足利幕府より筑後守護に任じられ勢力の回復に努めたが、一族内の争いなどもあり成就せず死去。墓所は片角の光善寺にある。持朝の子には為邦のほか、22代能運のときに反旗を翻した為光などがいる。

20代

菊池為邦（1430～1488）

持朝の長子。筑後守護として大友氏と領有権を争い敗れる。次男武邦が反乱を起こすなど一族の弱体化が顕在化しはじめる。他方で交易や教養に注力した。墓所は為邦が開いた江月山玉祥寺にある。

21代

菊池重朝（1449～1493）

為邦の長子。応仁の乱に乗じ筑後方面への勢力拡大を図るが弟武邦の反乱などで失敗した。文化・教養の面では孔子堂の建立や、連歌の会（菊池万句）を催すなど尽力。墓所は江月山玉祥寺で為邦の墓と並んでいる。

22代

菊池能運（1482～1504）

重朝の長子。隈部氏など家臣団の離反、20代為邦の弟為光の反乱などで一時は菊池本城を奪われる。奪還したときの傷が元で死去。菊池の直系としてはここで途絶えた。墓所は隈府にある。

23代

菊池政隆（1491～1509）

20代為邦の弟為安の孫。能運の「はとこ」。能運の遺言により家督を継承するが、家臣団の反乱や阿蘇氏などの介入があり、争いに敗れて久米の安国寺で自害した。墓所は泗水町豊水、久米の安国寺の裏にある。

24代

菊池武包（生年不詳～1532）

肥前菊池氏である武澄の後裔。阿蘇惟長（武経）が阿蘇に戻った後、大友重治（義武）が元服するまでの間家督をつなぐため、家臣団などの取り決めによって家督を継承。元服後は重治に家督を譲った。墓所は不明。

※菊池一族の情報はホームページに掲載していますのでぜひご覧ください。→

アドレス：http://www.city.kikuchi.lg.jp